

# 1人1台のタブレットで子どもをつなぐ

オンライン学習でも！対面学習でも！

墨田区立緑小学校 指導教諭 三好 恵美, 教諭 池野 久美, 教諭 遠山 光城

キーワード：iPad, 特別支援学級, オンライン, 子どもをつなぐ, 教育支援アプリケーション, 朝の会

## 実践の概要

知的な度合いに差があり、伝え、認め合うことが難しい子どもたち。1人1台のタブレット端末「iPad」を活用することで「自分でできる！」を増やし、その結果、子ども同士が伝え、認め合い、つながっていくことができると考えた。朝の会から始まった本実践は、全教科にわたってオンライン・対面学習で生かすことができた。

### 1. 目的・目標

#### (1) 1人1台のiPadの活用目的

本学級には、ASDやダウン症など様々な障害のある子どもが11名在籍している。どの子どもも自分なりの考えや思いをもち、友達や教師に伝えようとしていたり、新しいことにも前向きにチャレンジしたりするなど意欲的な姿がある。

しかしながら、知的な度合いに差があり、「分かり方の特性」や「表現方法」が様々であり、伝え、認め合い、子ども同士がつながることが難しいという実態がある。

学習指導要領によると、知的障害のある児童生徒の特性に「ICT機器の活用により、児童の能力が引き出される」とある。そこで、本学級では一昨年より、1人1台のiPadを支援ツールとして活用することで、「自分でできる！」を増やし、その結果、子ども同士が伝え、認め合い、つながっていくことができると考え、1人1台のiPadを活用することとした。

#### (2) 朝の会で「自分でできる！」を増やす

教育課程上では、朝の会は日常生活の指導に位置付けられている。日常生活の指導は、学校生活の中心となる活動ではなく、学習や生活の自然な流れの中で繰り返される習慣的な活動である。よって、毎日の習慣の中で必然性をもって行うことができるので、生活に関する様々な力が定着しやすい。

また、特別支援学級では、学力の実態の差が顕著に表れる国語や算数の教科では、小グループで実態に合わせた学習をすることが多い。一方、個別の学習だけでは得られない他者と関わる力の育成については、朝の会のように集団の中でこそ学ぶことができると考えた。

そこで毎朝1時間目に行う朝の会で、「自分たちで会を進めよう」という大きな目標を掲げつつ、「日課・予定」「人との関わり」「役割」「仕事」「きまり」等の生活・学習上の一人一人の課題が集団の中で克服できるよう指導計画を立て、主にタブレット端末を支援ツールとし、「自分でできる！」を増やしていきたいと考えた。

## 2. 実践内容

### 2.1 生活・学習上の困難さへの取り組みにおける考え方

特別支援学級では「できること」に着目して、子どもの能力を伸ばすことがとても大切であると考え。手伝ってもらえるのではなく、自分の力でできたときの達成感、子どもの自己肯定感を伸ばし、さらなる能力の飛躍にもつながる。よって、「文字が書けないから、なぞる。」

「話すことが難しいから、教師が代弁する。」など、できないことを補うだけの指導ではなく、困難さの背景について仮説を立てた上で、子どものできることに着目



図1 困難さへの取り組み

して指導・支援計画を立てるようにしている(図1)。

### 2.2 朝の会での実践

朝の会は日直が司会をし、子どもたちが協力して会を進める。集団の良さを生かしつつ、できることに着目し、iPadを活用して個別の生活・学習上の困難さの克服を目指した。以下の表にいくつかの例をあげる(表1)。

表1 朝の会における実践

困難さ/背景	できること	活用したICTやアプリ	様子
書き込み/空間認知が弱い	読むこと 話すこと	ロイロノート スクール	白旗の巻紙、文字カードを指し、声を聞きながら学級の友達に話した。
道徳領域の特性/授業の未習毎による自覚のなさ	見ること 手の操作	知楽音アプリ	クイズの進行に合わせて知楽音を選び、音を聞き、笑顔で自信をもって行った。
さまり守れない/見逃しがちで多い・忘れる	読み立て 文字入力 友達と関わる こと	ロイロノート スクール プログラミング ロボホン	さまりのプレゼンを作成し友達に話したりプログラミングしたりすることで忘れず守れるようになった。

### 2.3 子どもをつなぐ工夫～伝える・聞く～

集団の強みを生かした朝の会での活動を中心に、「伝える・聞く」という場面で以下のような工夫をすることで、認め合い、つながることができるようにした。話したいことを子どもが写真に撮り、ミラーリングしてモニターに映し出す。子どもが話すのと同時に教師がテロップを入れ、聞いている子どもへの理解を促す。指を指しながら自信をもって伝え、聞いている子どもたちが思わず話に引き込まれている様子が見ええる(写真1、2)。



写真1、2 伝える・聞く場面の様子

### 2.4 休校中の取り組み～オンライン学習～

iPadを活用し続けてきたことで、子どもにとってiPadが支援ツールとして定着してきた。その結果、コロナ禍による休校の際には、「ロイロノートスクール」を活用したオンライン学習を実践することができた。本アプリケーションは、対面授業に対応したものが、主に「画面配信」「提出」の機能を活用することにより、双方向でのオンライン学習を可能とした。久しぶりに子どもの笑顔を見ることができたときは本当に嬉しく、iPadを活用してきて良かった！と実感した。以下に実践例を紹介している(図2、3)。

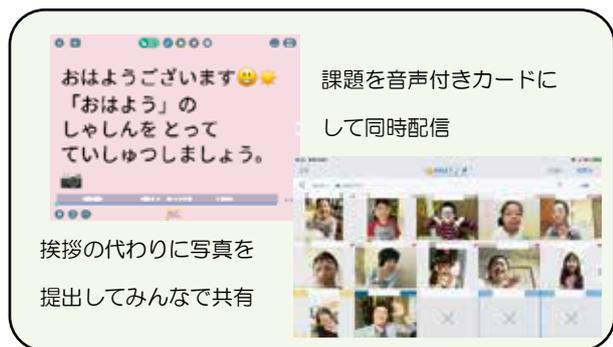


図2 オンライン学習の取り組み1



図3 オンライン学習の取り組み2

### 3. 成果

オンライン学習で、子どもの主体性を促すため、家だからこそできる学習はないかと考え、食育の学習で学んだことを生かし、「冷蔵庫の好きな食べ物紹介」を行った。すると、どの子どももすぐに提出してきた(写真3)。保護者の感想には、「目が輝いた」「やりたくて仕方ないという感じ」とあり、子どもが意欲的であることがわ

かった。

オンライン学習において子どもの主体性を促すために試行錯誤した経験は教師



写真3 冷蔵庫の好きな食べ物

の取り組みに主に2つの変容をもたらした。

第一に、自分のこととして捉えられるように必然性のある課題を提示すること、第二に、課題の提示を分かり方の特性に応じて具体物、文字・音声をつけるなどの工夫をすることである。また、オンライン学習を行うにあたって保護者が子どもに寄り添った結果、「学習の意図がよく分かった」「子どもの得意なことを初めて知った」と新たなつながりも得ることができた。

子ども同士がつながることを目的として始めた1人1台のiPadの活用だが、オンライン学習を通して、子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師、保護者と教師、さらに、子どもと保護者も「つながった！」と実感した。さらに、オンライン学習で培ったノウハウは、コロナ禍で実践が難しい活動や、互いに認め合い、子どもがつながる活動のアイデアを次々と生み出す原点になったと考える(表2)。

表2 コロナ禍でのタブレットの活用

実践の様子	どんなときに
	登校できない子どもとZoomで学習
	密や物の共有を避けるためiPadを活用
	鍵盤練習も1人1台のiPadで

### 4. 今後に向けて

今後はGIGAスクール構想により、学校全体で1人1台の端末環境が実現されていく。これまでの経験から大切にしていきたいことが2点ある。

①タブレット端末は手段であり、目的となつてはならない。実態によっては、アナログな方法も併用していくこと。

②安易にタブレットドリルや学習アプリケーションを使用してはならない。子どもにとって必要性のあるものを取捨選択して活用していくこと。

今後も、「何のため」という視点を常に念頭に置き、子どもの能力を引き出すために活用していく。